

創業60年記念  
わたしが読んだ童心社の本

## 魅力的な

### 校長先生と 子どもたち

小松崎進

このたまごのまわったる  
宮川ひろ・作 林明子絵  
（この本だいすき）  
（共に高文研）『この絵本読んだら』  
（だいすきこま先生）（文溪堂）など。  
その年も、さて、田の前の子どもたちに何を読もうかなーと思つていた時、『ひゅんびゅん』まがまわったる』と田舎でいたのです。

久しかりに五年生の担任になった時のことです。教師の仕事はいろいろありますが、わたしはその一つに、本の読み聞かせ（現在は、読みがたりといふ）とぼが育てられるからです。

その年も、さて、田の前の子どもたちに何を読もうかなーと思つていた時、『ひゅんびゅん』まがまわったる』と田舎でいたのです。

この絵本に出てくる校長先生の存在感。そして、子ども集団との関係のおもしろさに、ぜひ子どもたちは読んでみようと思いました。音読してみて、その思いをさらに深くしました（私は、くりかえし音読してみて、子どもたちへの読み聞かせの可否を決めていました）。

あそひばのかきを開けてほしことこへ子どもたちに、びゅんびゅん）まがまわせるようになつたら頼みをきいようと頑丈な校長先生。しかし子どもたちがひとつこまをまわせるようになると、今度はふたつ、みつつの時にと先生は挑んでくるのです。

子どもたちは、この変わった校長先生をじの感じ、どう思うだろ？、この絵本に登場する子どもたちをどう思つだろ？とか等々、興味津々でした。

校長先生と言えば、こんなことがありました。低学年の担任だった時、週一回、子ども1名で、校長室へ行って何か話を聞いてくることにしたのです。子どもたちが休み時間、運動場へ出でてくださること

お願いしてみたら、実際、二十分の休み時間に運動場に出られて子どもたちと遊ばれた校長先生もありましたが、長い教師生活の中でお二人でした。それも、年数回でした。

そういう状況の中で、絵本の校長先生は、なんと子どもの心をひきつける魅力のある先生でしょう。

さて、わたしの受けもつた五年生。絵本を読むと、「おもしれえ校長先生だね」

「ほんとうにいるかなあー、いたりこひなあ」「こんな校長先生がいたりおもしろいよ」

「いないよ」

「いるかもよ、学校はいっぽいあるんだから」「ほかの先生、どうして出してしないの？」

「校長先生と五、六人の子どもたちの話だからじやないの！」

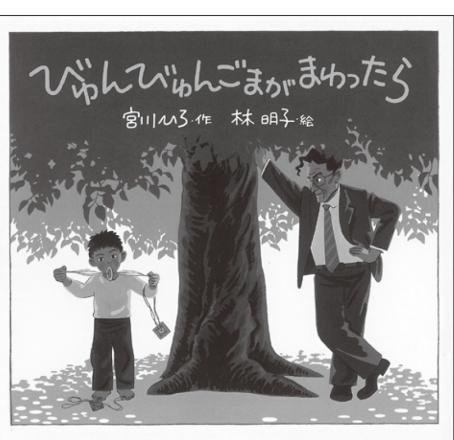
「そうかなあ」

と、話はいつまでも続きました。

もう一つ、「ほんたわも『こまわし』やってみようよ」の声。

だれが持つてきたか覚えていませんが、こまをつくつたり、遊び始めたりで、教室はたいへんにわやかになりました。作品の子どもたちと同じで、三つ、四つと遊びはどんどん増えていきます。

作品が実生活の中で生きていぬ、とてもいいましようが、じゅうぶん間、子どもたちの遊びの中心は「こまわし」でした。そして、「あの校長先生、おもしろいよね」のじのぼが、いつもでも出たのです。



宮川ひろ／作 林明子／絵